研究主題「会話を通して自分の思いや考えを伝え合い、互いに認め合う幼児を育てる指導の工夫－５歳児が友達と関わって遊ぶ場面に着目して－」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
港区立芝浦幼稚園　主任教諭　高田　清香

第１　研究のねらい

多くの幼児にとって初めての集団生活となる幼稚園において、友達と関わって遊ぶことは重要な経験の一つである。幼稚園教育要領解説（平成 30 年３月）（以下、「幼稚園教育要領解説」と表記。）には、「何人かの友達と一緒に活動することで、生活がより豊かに楽しく展開できることを体験し、友達がいることの楽しさと大切さに気付いていく」とある。また、友達との関係については、「互いが認め合うことで、より生活が豊かになっていく」とあり、幼児同士が認め合うことは重要な経験であることが示されている。

さらに、小学校教育との接続を踏まえ、特に５歳児には、友達に自分の思いや考えを言葉で伝えたり相手の話を聞いたりする経験が重視されている。しかし、近年の東京都公立幼稚園等の研究紀要等から、幼児の自己表出や他者受容に課題があることが明らかになっている。このことから、幼児が自分の思いや考えを言葉で表し、友達と伝え合い、互いに認め合うようになるための指導の工夫が必要である。

実際の指導では、「同時刻に様々な場所で様々な活動が展開」する中で、「全体を把握した上で、最も援助を必要としている幼児や活動を的確に把握し、対応する必要」（「幼児理解に基づいた評価」　平成 31 年３月　文部科学省）がある。中でも遊びの場面においてこうした状況が生まれやすく、一人一人の幼児への適切な指導に難しさを感じる教師は多いと考える。

そこで、５歳児が友達と関わって遊ぶ中で、会話を通して自分の思いや考えを伝え合い、互いに認め合うようになることを研究のねらいとし、一人一人に視点を当てた指導の工夫について探っていくこととした。

第２　研究仮説

５歳児が友達と関わって遊ぶ中で、教師が幼児の自己表出、他者受容の実態を捉えて指導の工夫を行えば、幼児は会話を通して自分の思いや考えを伝え合い、互いに認め合うようになるだろう。

第３　研究の内容と方法

１　基礎研究

(1) 本研究に関する文言の定義（表１）

本研究に関する文言を、幼稚園教育要領解説を参考に、表１のように捉えた。

表１　本研究に関する文言の定義

文言	定義
会話	言葉や表情などで自分の思いや考えを表出し、相手の言動に応じてやり取りすること。
認め合い	友達と関わる中で、友達と自分との違いや多様性に気付いたり、それをよさとして受け入れたり、肯定的な関係になったりすること。
自己表出	幼児が友達に自分の思いや考えを言葉などで表出すること。
他者受容	幼児が友達の思いや考えを受け止めたり受け入れたりすること。
指導	具体的なねらいや活動に向かって教師が幼児を導くこと（幼児理解、援助、環境の構成等を含む）。
援助	教師が幼児に対して直接的に働き掛けること。

(2) 「認め合いの基盤となる経験」

幼稚園教育要領解説を参考に、幼児が認め合うようになるために必要な経験を、「関わりを

もつ」、「違いや多様性に気付く」、「よさとして受け入れる」、「肯定的な関係になる」、の４点に整理して「認め合いの基盤となる経験」と位置付けた。

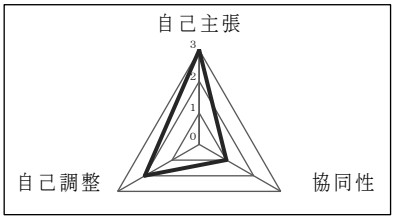

図１　幼児の実態を捉える観点

(3) 幼児の実態を捉える観点（図１）

「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」（平成 29 年３月　国立教育政策研究所）の中で、「育ち・学びを支える力」に示された５因子から、自己表出と他者受容に関連が深いと考えた「自己主張」、「自己調整」、「協同性」の３因子（以下、３観点と表記。）を取り出し、遊びの場面における幼児の実態を捉える観点とした。

(4) 幼児の発言の内容の捉え方

幼児の言葉による伝え合いや、認め合いを主題とした近年の東京都公立幼稚園等の研究を基に、遊びの場面における多様な幼児の発言の内容を分類する方法を見いだし、発言の内容の捉え方として整理した。また、発言の内容の捉え方と「認め合いの基盤となる経験」との関連性を明確にした。

２　調査研究（令和２年７月中旬～８月下旬　都内公立幼稚園１園）

調査研究を以下のように行った（**表２**）。

表２　調査研究

方法	対象	目的	内容
教員への聞き取り	6名	「認め合いの基盤となる経験」に関連した指導経験の把握	これまでの指導経験から、幼児の認め合いを引き出すための具体的な指導の工夫について聞き取りを行った。
対象児の観察記録	5名	言動の記録と３観点による実態把握	対象児の言動の記録から遊びの内容や友達との関わりを捉え、実態を３観点で把握した。
5歳児全体の観察記録	約40名	発言の記録と整理	5歳児全体の自己表出と他者受容の実態を捉え、研究の方向性を確認した。

３　開発研究

(1) 開発に当たっての考え方

「認め合いの基盤となる経験」における幼児の姿を明確にするために、本研究における自己表出と他者受容の捉え方を、調査研究を基に整理した（**表３**）。

幼児は友達と関わる中で、相手に対して自己表出をし、相手に受け入れられるという経験を積み重ねることで認め合うようになっていく。相手に受け入れられないこともあるが、まずは自己表出がなければ、受容される経験も得られない。以上のことから、幼児の自己表出に焦点を当てて、研究を進めていくこととした。

表３　自己表出及び他者受容する姿　（Ⅱ期　９月　Ａ児）

時期	観察記録	自己表出と他者受容の捉え
Ⅱ期 １日目	ｆ児と船ごっこをしている。A児が「ちょっと探検に行ってくる。」とつぶやき、船に見立てた場から出て床で泳ぐ真似をする。ｆ児は気付かずにいる。教師がｆ児に「ｆさん、Aさんが海に探検に行ったよ。」と知らせるとｆ児はA児の様子を見て、自分も船の場から出て真似をする。しばらくして、二人で一緒に笑顔で船の場に戻る。	A児のつぶやき（自己表出）を教師がｆ児に知らせることで、ｆ児がA児の思いや考えを受け止めて遊ぶ姿（他者受容）が見られた。
Ⅱ期 ２日目	前日同様にｆ児と船ごっこを始める。場作りの途中でｆ児が「私はどこに座るんだ。」と困ったように言うと、A児が椅子を持って来てｆ児の場所に置く。ｆ児が「マグロを炒めよう。」と言うと、A児はそれに応じて「フライパンは?」と言う。ｆ児が料理に使う材料をA児が切り、一緒に作る。	ｆ児の言動（自己表出）にA児が気付き、ｆ児の思いや考えを受け止め遊ぶ姿（他者受容）が見られた。

(2) 「認め合いを支える指導の手だて活用表」の開発

基礎研究や調査研究から、「認め合いの基盤となる経験」を視点として目指す姿を捉え、表出を促したい言動の例を具現化した。次に、教師の指導の工夫を明確にして、「認め合いを支える指導の手だて活用表」（以下、活用表と表記。）（**表４**）を作成した。

表４　「認め合いを支える指導の手だて活用表」（一部抜粋）

「認め合いの基盤となる経験」		目指す姿	表出を促したい言動の例	指導の工夫	指導の際に参考にする項目	実践事例
経験	項目					
A 関わりをもつ	3	していることを言葉で友達に伝える。	「これは～なんだよ。」、「～しているんだ。」 自分の行動を説明する。	幼児の行動を言葉で表して確認する。 幼児のしていることに関連した問い掛けをして説明を促す。	A-1	事例②
	4	自分から友達に声を掛ける。	「ねえ。」、「〇〇さん。」、「それ～だよ。」 友達に呼び掛けたり、話し掛けたりする。	友達に声を掛けるきっかけを知らせる。 教師も一緒に声を掛ける。	A-2	―
B 違いや多様性に気付く	2	友達の言動に対して返事をして受け入れる。	「いいよ。」、「どうぞ。」 友達の言動を受け入れる返事をする。	友達の言動を知らせて返事をするように促す。 受け入れた様子を認める。	A-6	―
	3	友達に思いや考えを尋ねる。	「どうする？」、「どう思う？」 友達の思いや考えを知る。	友達の様子に気付かせる。 尋ねる時の具体的な言葉を知らせて関わりを促す。	―	―
C よさとして受け入れる	1	友達の言動の面白さに気付く。	「それいいね。」、「それは面白いね。」 友達の言動から友達の思いや考えに関心をもつ。	友達の言動に気付かせる。 友達の言動を受け入れるための具体的な言葉を知らせる。	―	―
	2	友達のしていることを知り、手伝ったり励ましたりする。	「手伝おうか。」、「がんばって。」 友達のしていることを手伝ったり、応援して励ましたりする。	友達の様子に気付かせる。教師がモデルになって手伝ったり応援したりする。手伝いや応援がしやすいように場を設定する。	―	事例⑦
D 肯定的な関係になる	3	友達の思いや考えを尊重する。	「それがいいと思う。」、「そうしよう。」 友達の思いや考えを理解し、受け入れることを伝える。	友達の思いや考えを理解したことが言葉で伝えられるように促す。 友達と互いの理解が深まったよさを認める言葉を掛ける。	C-3 D-2	―
	4	気付きや面白さを言葉で表して友達と共有する。	「～が面白いよね。」、「～が楽しかったよね。」 友達と活動を振り返る。	友達と活動を振り返る機会をつくる。感じた気付きや面白さを引き出したり、改めてそれぞれの思いや考えについて問い掛けたりする。	C-3 D-2 D-3	事例⑪

４　検証授業（令和２年９月（Ⅰ期）、10 月（Ⅱ期）、11 月（Ⅲ期）　計５日間）

都内公立幼稚園、５歳児５名を対象児として抽出し、自発的な活動としての遊びの場面において検証授業を実施した（**表５**）。

表５　検証授業時の本日のねらい

	本日のねらい
Ⅰ期	・　友達と遊びのイメージを出し合いながら、一緒に遊びを進めていこうとする。 ・　友達の思いや考えが自分と違うことや、友達の考えのよさや面白さに気付く。
Ⅱ期	・　友達と互いに思いを受け入れ合ったり、友達の考えを遊びに取り入れたりする。 ・　友達と一緒に遊ぶ中で、気付いたことや一緒に遊ぶ楽しさを言葉で表して伝え合う。
Ⅲ期	・　一緒に遊ぶ友達と話をする中で、互いの思いや考えの違いに気付いたり、遊びのめあてを共通にしていったりする。 ・　友達と遊びのイメージを確認したり、遊び方を相談したりしながら遊ぶ。

(1)　対象児の保育指導案（表６）

学年担任２名と協議して３観点による分析を行い、対象児の実態を踏まえた上で、活用表を基に「認め合いの基盤となる経験」で該当する必要な経験や目指す姿を設定し、表出を促したい言葉の例や指導の工夫を確認した。さらに、具体的な働き掛けを本時の指導に記載した。

表６　対象児の保育指導案（Ⅰ期　９月　Ｂ児　一部抜粋）

対象児の実態		活用表の該当する項目				本時の指導
遊びの観察による実態の考察	３観点による分析	「認め合いの基盤となる経験」	目指す姿	表出を促したい言動の例	指導の工夫	
・　大型箱積み木等の遊具を使って率先して場作りをする。(略)遊びのイメージが明確で、言葉で表して友達に伝える。 ・　自分の遊びのイメージに沿って友達に動いてほしい気持ちから、指示が多くなっている。	自己主張 自己調整　協同性	違いや多様性に気付く	友達に思いや考えを尋ねる。（Ｂ－３）	「どうする？」 「どう思う？」	友達の様子に気付かせる。 尋ねる時の具体的な言葉を知らせて関わりを促す。	・　本児の発言の後に友達がどんな反応をしているのか具体的に知らせる。 ・　「優しく言ってほしい。」、「一緒に決めよう。」など、友達の思いや考えを代弁して伝えたり、よりよい伝え方を知らせたりする。

実際に対象児が友達と関わって遊ぶ姿や教師の指導について、事前に設定した活用表に該当する項目を観点として、幼児の具体的な変容を確認し、次時の目指す姿の設定につなげた。

(2)　検証授業の実践と指導の工夫

Ⅰ期～Ⅲ期の検証授業を通して、遊びの場面における対象児の会話及び経験を分析し、教師の指導の工夫と幼児の経験内容について明らかにした。次に示すのは一例である（**表７**）。

表７　対象児の会話及び経験の分析と実際の指導の工夫（Ⅱ期　10 月　Ｂ児）

時期	観察記録（下線は友達との会話と捉えられる部分）	実際の指導の工夫	「認め合いの基盤となる経験」の分析
Ⅱ期 1日目	Ｂ児はｇ児、ｈ児と一緒にビー玉転がしのコースを作る。ｇ児の問い掛けにＢ児が応答せずコース作りを続け、ｇ児が泣き出す。教師がＢ児にｇ児のことを「悲しそうだよ。」と伝えると、Ｂ児はｇ児を見て返事をする。	友達の様子に気付かせる。	違いや多様性に気付く
Ⅱ期 2日目	翌日も同様にコース作りを始める。ｇ児が段ボールを切り始めると、Ｂ児が「手伝ってあげる。」と言い、ｇ児と一緒に作業する。教師は「二人でやれば早いね。」と声を掛ける。その後、二人でガムテープを切る役と貼る役、段ボールを押さえる役など分担しながらコース作りを進めた。	手伝いやすいように場を設定する。友達を手伝う姿を認める。	よさとして受け入れる
	20分後、Ｂ児は「お客さんを呼ぼう。」とｇ児やｈ児に言うが、二人は「お客さんいないし。」と言ったり、まだコース作りを続けたりし、客を呼ぶことには賛同しない。教師がＢ児に「コースでビー玉を転がしてみたの？」と聞くと「やっていない。」と言う。教師とｈ児が一緒に見守る中でＢ児はビー玉を転がしてみる。１回目はビー玉が途中で止まり、２回目はビー玉が転がり跳ねる動きをする。Ｂ児は「楽しい。」と嬉しそうに言い、次にｈ児に顔を向け、「楽しいね、これ。」と言う。ｈ児は「うん。」と返事をする。教師も「楽しいね。」と声を掛ける。	気付きや面白さを友達と共有する姿を認める。	肯定的な関係になる

活用表を基に目指す姿を設定し、遊びの場面における指導の工夫を明確にしたことで、認め合いにつながる会話を促すことができた。友達との会話を通して、幼児が自分の思いや考えを伝え合い、「認め合いの基盤となる経験」を積み重ねていくことが確認できた。

(3) 対象児の変容

対象児の遊びの場面における記録から幼児の発言を取り出し、基礎研究(4)幼児の発言の内容の捉え方を基に分類した。次に示すのはＢ児の例である（**表８**）。

表８　発言の内容の捉え方を基にした「認め合いの基盤となる経験」の確認　（Ⅰ期～Ⅲ期　Ｂ児）

発言の内容の捉え方		思ったことを言う	自分の主張をする	挨拶や返事をする	注意や指示をする	していることや遊びのイメージを具体的に話す	確認や質問、相談をする	励ます	感情を共有する、共感する	共通の話題で話をする	提案をする	
「認め合いの基盤となる経験」		関わりをもつ										
			違いや多様性に気付く									
						よさとして受け入れる						
								肯定的な関係になる				
発言の出現率	Ⅰ期	8%	4%	4%	32%	28%	16%	－	－	－	8%	100%
	Ⅱ期	15%	15%	27%	15%	8%	12%	－	4%	－	4%	100%
	Ⅲ期	8%	8%	4%	20%	16%	12%	8%	4%	8%	12%	100%

発言の出現率の変化から、３観点による実態把握と活用表を用いた指導の工夫により、幼児の発言の内容が変容し、「認め合いの基盤となる経験」を積み重ねていくことが確認できた。

第４　研究の成果

- ３観点による実態把握と活用表を用いた指導の工夫により、幼児は友達と関わって遊ぶ中で会話を通して自分の思いや考えを伝え合うようになり、互いに認め合う姿が引き出された。
- ３観点による実態把握をレーダーチャートで可視化したことで、個人の変容が見取りやすくなり、「認め合いの基盤となる経験」や目指す姿の設定が容易になった。
- 検証授業を通して、５名の全対象児が「認め合いの基盤となる経験」を多様に積み重ねていくことが確認できた。幼児の遊びの内容や関わる友達との関係性、前日までの経験の積み重ねが幼児の「認め合いの基盤となる経験」と関連することが明らかになった。

第５　今後の課題

- 活用表の精度を高め、幼児同士の更なる認め合いの実現を目指した指導を工夫する。
- ３歳児、４歳児における「認め合いの基盤となる経験」について考察し、３学年の発達を見通した活用表を開発する。
- 小学校教育との接続において、個々の幼児の成長を伝える際に、具体的な幼児の変容や教師の指導の意図を伝える手だてとして本研究の活用を図る。